

運動会種目練習の教育的効果に関する研究

—中学校における40人41脚のプログラムに着目して—

猪田 恵梨奈 (生涯スポーツ学科 学校スポーツコース)

指導教員 森川みえこ

キーワード: 運動会 仲間づくり 多人多脚 有能感

1. 諸言

運動会で行われる種目は、組体操やクラスごとに競い合う集団種目が用意されている。桜井(1997)によって、クラスが集団で一斉に動くことにより、一定期間の練習で、運動有能感や仲間作りができる受容感が生まれることを述べている。筆者も運動会の経験で、1つの種目にクラス皆が取り組んで練習をすることで、連帯感やクラスの団結を味わえた。本研究では、中学二年生を対象に運動会の集団種目である多人多脚を基に、集団で行うことによって生じる効果について明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

1)2010年9月3日から9月17日の運動会当日までの体育授業における運動会の多人多脚の練習で1学級39名を対象に実施した。

2)観察記録

1.映像記録 二週間の練習期間の前後に撮った。

2.行動の実態記録 4点を毎回記録した。

- ①個人としてできるようになる。
- ②集団としてまとまりリズムを共有できる。
- ③みんなで協力する姿が見られる。
- ④仲間意識がモチベーションを高めている

3)質問紙 アンケート調査

1.仲間作りの成果について(計4回)

2.運動有能感の変化について(練習期間の初めと終わり計2回) 上記の1と2の調査は練習日の終わりのHRで実施した。

結果の処理は、統計処理ソフトを「SPSS13.0J for Windows」を用いて、T検定を行った。

3. 結果と考察

練習最終回の観察記録から、39人40脚で走っている時に視線が前方に向いている。

失敗した時の反応が、個人の失敗ではなくクラス全体の意識として捉えられていた。アンケート調査では、仲間づくりは運動有能感とは違い、仲間づくりの中の集団的達成という項目に有意さが見られ成果があった(表1)。運動有能感には有意さが見られず短期間の練習では集団の団結が運動に対する有能感を高めることには関係性がなく変化がなかったと考えられる(表2)。

表1 仲間づくりについてのアンケートの調査結果

因子	最初	中間	最後	運動会
集団的達成	2.28	2.32	2.56	2.42
集団的思考	2.35	2.24	2.44	2.36
集団的相互作用	2.21	2.12	2.32	2.31
集団的人間関係	2.09	2.18	2.40	2.31
集団的活動への意欲	2.60	2.63	2.71	2.63

表2 2-1 運動有能感の変容

項目名	最初		最後		t値 N=38
	平均得点	標準偏差	平均得点	標準偏差	
身体的有能さの認知	10.64	3.990	11.33	4.847	-1.206
統制感	15.03	3.773	15.05	4.371	-0.036
受容感	15.00	3.309	14.92	4.157	.116
合計得点	40.67	8.707	41.31	11.881	-3.92

4. 結論

練習で課題達成し喜びを感じることができ、運動会に向けて練習の改善点を多く話し合い、本番に備えて取り組んでいた。自己の成功から全体で成功することに喜びや満足度を得た。他者への気配りや自己の受容感が満たされることにより、練習への意欲も高まることが考えられる。クラスで1つのことに取り組むことで、集団への意識が高まり仲間づくりの効果があり向上することがわかった。しかし短期間の練習では運動有能感の変化がなかった。

5. 参考文献

- 1) 高橋健夫編著(2003)体育授業を観察評価する.明和出版: pp16-19・pp27-30